

仏教音楽：生命(いのち)の流れとひびき

著者	渡邊 顯信
雑誌名	真実心
号	17
ページ	1-35
発行年	1996-03-10
URL	http://id.nii.ac.jp/1108/00000561/

佛教音楽について

——生命（いのち）の流れとひびき——

渡邊顯信

ただいま学長先生からご紹介いただきました、大谷大学の渡邊でございます。今、学長先生のほうからお話ございましたが、一昨年と昨年、そして私にとって今日で三回目の宗教講座です。内容はいつも仏教音楽について日頃感じていますことを申しあげるといふことにさせていただきます。お待ちしております。

レジュメを用意いたしましたので、それに添う形でお話を進めていきたいと思えます。

「はじめに」というところに「生命いのちの実感」と書きました。今年になって、生命というものを考えさせられる出来事が二つございました。一つは一月十七日の阪神大震災です。五千五百人

以上の亡くなられた方々の中で、押しつぶされた家の中に閉じ込められたまま焼け死んでいかれたという事実があります。その事実を思いましたときに、やはり生命というものを強く考えさせられました。それは皆様も一緒だと思います。

昭和二十年の終戦直前、私ははるか海上の全然見えないところから打ち込まれてくる砲弾の下での艦砲射撃を二度ほど経験いたしました。大災害でした。もちろん砲弾ですので着弾地点は深くえぐられ、遺体が飛散していました。その翌日は、戦闘機がやって来て、片づけている非戦闘員の一般市民めがけて機銃掃射をするわけです。悲惨なことでした。残酷なことでした。生地獄でありました。

そして、その後に伴ってまいりましたのは食料難や飢餓です。今度の阪神大震災の場合でも、食料の一人分、二人分を求めて長蛇の列ができましたね。私は五十年前の自分自身の体験と重ね合わせまして、生命というものを改めて考えさせられたことでした。

たまたま読んだ新聞に「母の骨を鍋に、少女は……、迫る炎、別れ悲痛」という見出しの記事がありました。小学校三、四年生の女の子に関する記事であります。ご覧になった方もいらっしやると思います。三月十七日の夕刊のトップに載っていました。そのニュースソースを書か

佛教音楽について

れた方は兵庫県の五十四歳の警察官の記録でした。

その警察官は自分の責任上あちこちを巡回しているときに、鍋を前にじっとうずくまる小学校三、四年生と思われる一人の女の子に出会った。どうしたのかと思って寄ってみると、鍋の中に炭化したお骨が数片入っていたそうです。呆然としていたその女の子は、その警察官が声をかけると、ドッと涙を溢れさせて、そして泣きながらぼつぼつ話をはじめたそうです。この鍋のお骨はお母さんだそうです。少女はお母さんと二人暮らしたようです。甘えん坊だったのでしょうか。お母さんの懐に抱かれて毎晩寝ていたようです。それが十七日の朝、あの地震であつという間につぶれてしまった。自分だけはかろうじて外へ逃れた。呆然としているうちに、気がつくと火事が近くに逼っていた。あわてて壊れた家の下敷になっているお母さんを助けようとした。走りまわっている周囲の大人たちに「助けてほしい」と声をかぎりに泣き叫びながらお願いしたそうです。しかし、大人の方々も自分のことで精一杯で、あなたにも助けただけなかった。

そのときにその女の子は、母を助けられるのは自分しかないと哀しい決断をしたということです。そして「お母さん、お母さん」と叫び続けながら懸命に瓦礫などを除き、やっとの思

いでお母さんの手を捜し当て、握りしめた。お母さんは懸命に言葉を出したらいいのですが聞き取れなかった。しかし、ようやくそのかすかな声が、お母さんが自分の名前を呼んでいるということがわかった。しかし炎が近づいて来た。そして、最後に彼女が聞いたのは「ありがとう。もう逃げなさい」という言葉で、母は握っていた手を離れたと書いてありました。その子は燃える家を見ながら立ちすくんだそうです。翌日は何をしたらか覚えていなかった。翌々日、自分の家へ戻って、お母さんのお骨を拾い集めた。それが焼けただれた鍋の中のお骨であった、ということでした。

その女の子が今どうしているのか、そしてこれからどういうふうになっていくのか、私にはわかりません。ただ、五十年前に私どもの世代で両親や家族を失い、戦災孤児になった人々の多いことを知っております。そういうことを思いますと、その子の苦しみ、悲しみ、そういうものが少しわかる気がいたします。

それから二つめは、三月二十日のサリン事件であります。人間の生命というものがこんなにも違う形で軽く扱われていいものなのでしょうか。

オウム真理教のことにつきましては、皆さんはすでにご存じでいらっしゃると思いますが、一つだ

佛教音楽について

け申しあげておきたいことがあります。オウム真理教の原点は原始仏教だといわれておりました。しかし、それは大いなる誤解です。原始仏教ではああいうことはいたしません。また仏教そのものはああいうことを考えません。逆にああいうことを考えやすい、行いやすいのが人間の弱さだということに気づかせ、そのような感性を深めさせることを教えているのが仏教であります。ですから、彼等は単純に原始仏教とか、ヒンドゥーとか、オウムという言葉を使っていますが、正しい理解に基づいたものではありません。オウムという言葉もあんな簡単なものではありません。もっと深い言葉です。そういうことをぜひ心に留めていただき、テレビ等で報道される表面的なものに惑わされることなく、厳しい目で真実を見抜いていただきたいと思います。

そこで、二番目の「宗教の本質」という問題になります。普通は「宗教≡Religion」と考えられます。しかし、ここに書きましたとおり、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教といった宗教と仏教とは実は根本的に大きな相違があります。結論から申しますと、仏教は宗教ではありませんが、厳密に云いますと「Religion」ではありません。

レジュメに「啓示の宗教と目覚めの宗教」と書きましたが、つまり「啓示 revelation の宗

教」と「自覚 Buddha の宗教」である仏教とは異なるということです。「Revelation」のほう
はご存じの方も多いと思いますが、啓示あるいは天啓と申します。啓示とは、神の恩恵、天啓、
恩寵のことですから、「啓示の宗教」とは、旧約聖書あるいは新約聖書等に基づいて、神の意
思が直接示されるキリスト教のことをいいます。ですから「自覚・目覚め」を主体とする「佛
陀の宗教」と同じではありません。

ところで、「宗教」という語の語義を確認しておきたいと思います。「宗」は「ウ冠」に「示」
です。「示」は机という字の古字で、お供え物をするという意味もあるようです。中国の場合、
漢字の「神」は「GOD」ではなく祖先の魂「祖霊」のことを指します。祖霊そのものを尊ぶ
ことであります。ですから「宗」という字は、同一家族、血統、あるいは本源ということから
「最上」とか「最尊」というような意味も出てまいります。

仏教用語で「Siddhanta」という言葉があります。皆さんは卒塔婆などに書いてある文字を
ご覧になったことがあるでしょう。あれは「悉曇 Siddham 文字」といいます。同じ語根です。
「Sidh」という動詞がありますが、これは完成する、あるいは充足させるという意味です。そし
てそれに「anta」が付きますが、これは終わり、局地、究極という意味です。この「Siddhanta」

佛教音楽について

という言葉葉を漢訳者は「宗」という字で表現しました。

この「Siddhanta」という言葉の事例は、『梵文入楞伽經 Lankāvatārasūtra』に見られます。このお経は紀元前後の成立で、西暦四百年代に翻訳されています。その漢訳のときに「Siddhanta」という言葉が「宗」と訳されました。すなわち、仏教の究極を「Siddhanta」といい、その究極に基づいて存在する境地、それが「宗」ということであります。

「教」という字も、実は偏の部分とつくりの部分から成立し、それぞれに倣う、勵ますという意味があります。いずれにしても、宗教というのは、仏教の究極・要点を説き表す教説、教法を倣い学ぶことであります。

それに対して「Religion」は、レジユメにありますとおり大体二つの意味があります。「re」は再び、「lig」は結ぶ、縛るという意味。キリスト教学者はこのように理解されるようですが、この語句は紀元前頃から使われております。いずれにしても、バイブルによると墮落した最初の人類アダムとイブは天国から追放されましたが、それを再び結ぶこと、即ち、追放された罪人の人間と、万物の創造主である神とを、再び関係づけること、それが「Religion」です。ですから、明らかに「宗教 ≡ Religion」という構図は修正されなくてはなりません。これは明治

の翻訳時期に、その頃の宗教理解のなかで、安易にあてはめてしまった結果であるといわざるを得ないと思います。

このように仏教は「自覚の宗教」であり、つまり仏教の立場からは宗教というのはまさしく自覚の問題を扱うものと言えると思います。自分が生きているという事実、そういう事実へ気づかせられますと、「生きていた」との思いから実際には「生かされていた」という実感に深まります。「生かされて今自分が生きている」ということです。これは非常に大事なことです。「生命」という言葉を、ある言語学者の方は「息のあるうち」という意味だとおっしゃっています。「いきのあるうち」だから「いのち」。息がなくなるとは生命というのは存在しないということですから、生きているという事実をどういうふうに理解していくか、それが宗教の場合非常に大事なことになると思います。宗教だけではなく、生きるということの根本にそれが必要になってまいります。それをさらに深めるのが宗教の世界だと言っているかと思えます。

ここで少し仏教用語の確認をしておきましょう。まず「縁起」という言葉です。すべての物事はいろいろな要素が集まって生じています。縁起がいい悪いという意味ではなく、事実や物

佛教音楽について

事はいかにして生じているかという因果関係です。いろいろな要素や事実が集まって、「一つの事象」が存在しているのです。そういうことが「縁起」ということです。

次に「無常」という言葉です。自分は十八、十九、二十歳の若者だけれども、いつまでもそのままだと思っている方はいらっしやらないと思いますが、一足飛びに四十、五十歳になるとは思っておられないでしょう。遠い遠い将来のことと思っている。しかし、遠い将来というのは、私自身が経験してみますと、実は遠くなかったのです。気がついたら五十代になっていました。

地球の寿命は百億年で、現在五十億年残っているそうです。と同時に人間の歴史は三千万年だといわれます。そこからみれば、五十年、四十年というのはあつと言う間の時間です。そういう意味で、「無常」という言葉はけっして消極的なマイナスの面だけではなく、成長するというプラスの面や積極的な面も「無常」です。皆さんが深まっていくか、この場で留まるか、それも「無常」です。存在し、生きて生命をながらえて行けるならば、その中味が深まるように、発展するように生きたいものですね。

その次に、最も確認していただきたい言葉が「真実・真理」です。「真実・真理」のことを

サンスクリットでは「saṅgā」と申します。それがパーリ語では「サッチャ」となります。若干音を変えますとサティアンとなります。オウムのほうでは「サティアン」という言葉と「サッチャ」という言葉の両方とも使っています。雑誌か何かのほうは「サッチャ」となっています。サンスクリットもパーリ語も非常に安易に使っています。仏弟子の名前も軽率に使っていますが、あれは非常に悲しいことですね。似非よせ仏教者の間違った使い方です。残念に思います。最後に「無明 avidyā, avijā」とは、真実を知らないということ、本当の事実を知らないということ。皆さんは「リグ・ヴェーダ Rg-veda」という言葉をお聞きになったことがあると思います。インドの古い文献ですが、この「veda」の語源は「vid 知る」という言葉です。この名詞形が「vidyā, vijā 知、明」で、それに「a」という否定語がついていますから、知らない、無知、無明ということ。無明ゆえの誤ちが、今われわれの周囲にたくさんあるように思われます。

まず、「仏教音楽」について申しあげたいと思います。「釈尊と音楽」としましたが、仏教と音楽がどのように結びつくのかをみていきたいと思えます。

仏教の基本は、仏陀、目覚めた方の教えを学んでいくということでありました。そして、そ

佛教音楽について

の仏教の基本が釈尊当時の最初期に、具体的にどういう形で現れたかといえますと、パーリ語で表記されました。パーリ語はサンスクリットよりも古いといわれており、紀元前からある言語の一つで、厳密には言語というよりも、釈尊の教えを伝えるために使われていた言葉ということになります。それがのちほど標準語的に整理されたものがサンスクリット、梵語です。

そのパーリ語の經典に、レジユメに出しましたとおり、『帝釈所問經』という長部經典(Diḡha-nikāya)があります。サッカパンハースタタタ(Sakka-pañhā Suttanta)です。その經典に次のような文章があります。釈尊のいわれたところだけ読んでみますと、

パンチャシカよ。今、汝の弾いたベルヴァ製の黄色いヴィーナの絃の音は、「汝の」歌の音色と調和し、歌声は絃の音色と調和していた。しかもパンチャシカよ、汝のその絃の音色は「汝の」歌の音色に勝らず、歌声は絃の音色に勝ったものではなかった。

歌声と音色とが非常に心地よいバランスでひびいていたということです。これが漢訳經典のほうでは、人の心を感動させたと書いてあります。そして、「汝が奏でる琴には数多くの意味があった」と。一つは欲望といったものを避けるべきだということを説き、もう一つは梵行、正しい行いを説き、もう一つは沙門を説き、それから涅槃を説く。涅槃というのは仏教の究極の

理想の世界です。それをパンチャシカの演奏した歌声とヴィーナのハーモニイの世界が説いていたということです。

もちろん音楽といわれるものすべてが同様なのではなくて、音楽にもいろいろなものがあります。過激に心を乱すものや、度を越すと音楽が騒音化してしまい、時にはかなりポリウムアップするために聴覚障害を起こしそうなものもあります。一時期それに溺れる時期もありますが、実際には、音というものは生きていなければ音になりません。物理的な音もありますが、心に響き伝わった音こそが生きた音といってもいいのではないのでしょうか。

釈尊滅後の經典の編纂會議のことを「結集^{けつじゅう}」といいますが、先ほどのような楽器とともに歌うということ、或はお互いに相手の音を聴き合いながらも演奏し合うということが、「結集」という意味です。ですから、仏教の「經典編纂會議」の言葉の中に、すでに仏教の姿勢や精神が表れているのです。

以上をまとめますと、仏教音楽というのは、仏様、真実を悟った方の教え、それを音楽にしたもので、その生命感あふれる「音」という真実の響きを楽しみ、求めることです。この「楽」という字は、実は「願う」という意味もあります。漢和辞典を見ますと、あとのほうに「願う」

佛教音楽について

という意味が出てまいります。親鸞聖人は、「信楽^{しんがく}」と書いて、「願う」と読んでおられます。つまり音楽とは、私どもにとりましては、本当の響きを願ひ求めるもの。願ひ求めるとそれにふれたときに喜びをもちます。それが仏教音楽の真実の目的であり、意味だと言えると思いますが。

次に「仏教音楽、その流れ」といたしましたのが、その歴史をみてみたいと思います。インド、スリランカ云々と書きました。スリランカの場合ですが、最初にパーリ語を二つ出しました。ともにメロディーをつけて読誦されます。一つ目は『三帰依文』(Tri-Sarana)です。

Buddham saranam gacchāmi ブッタン サラナン ガッチャーミ みずから仏に帰依したてまつる
 Dhammam saranam gacchāmi タンマン サラナン ガッチャーミ みずから法に帰依したてまつる
 Saṅgham saranam gacchāmi サンガン サラナン ガッチャーミ みずから僧に帰依したてまつる

三句とも最初の Buddham, Dhammam, Saṅgham だけが違って、あとは同じです。「sarana」というのは拠り所、安心する場所、帰依する場所という意味です。「gam(行く)」という動詞の一人称単数現在形が、「gacchāmi(私に行きます)」です。「gacchāti」となりますと三人称です。ですから「gacchāmi」というのは「他人が」ではなく、「私が」という主体的表現で

す。「Buddha, Dhamma, Sangha」は「仏法僧」と訳します。「三帰依文」を唱えるというこ
 とは「私は三宝を拠り所とする」という積極的な決意表明をすることです。

二つ目の、『法句經』(Dhammapada)は、初期のパーリ語聖典の一つです。これは釈尊
 の経説の中から重要な言葉を集めたものです。いわば仏教のエッセンスの詩集といってい
 思います。その中に、「Na hi verena verāni sammant'ida kudācanam, averena ca sam-
 manli, esa dhammo sanantano.」(まじいこの世では、怨みによつては怨みは決して消える
 「しずまる」ことはない。怨みより離れてこそ消える、これが永遠の真実「教法・基本」である)
 という言葉があります。この言葉は、昭和二十六年(一九五二)の対日講和会議の席上で、ス
 リランカ国の代表が「賠償請求権放棄演説」でも引用し、各国に感動を与えたことでも有名に
 なりました。

以降、チベット、中央アジア、中国、そして韓国、朝鮮を経由して日本に入ってきます。そ
 れが「声明」となりました。サンスクリットでは「śabda-vidyā」。これは五つの学問体系を
 表す「五明 pañca-vidyā」のいちばん最初に位置づけられる学問体系です。言語、文字音韻、
 文法に関する学問という意味です。ですから、いろいろな学問のなかでも最も基本におかれる

佛教音楽について

べきもの、それが「sabda-vidya」也。

声明の本を見ると、言葉のわきに「ユリ」が書いてあります。謡曲をなさっている方はご存知ですね。あれがまさしく楽譜の一つです。当然ですが昔は五線譜でない表記法がとられていました。

最初期は楽譜はありませんから、手でメロディーを表現しておりました。ですから、指揮をするということはけっしてメトロノームのようにリズムだけを表現することではなくて、演奏の仕方を表現するということです。それが「博士^{はかせ}」という記譜法となって、客観的に示されるようになったわけです。

では、こうして日本に伝えられた仏教音楽は、近現代にはどのような歩みをみせたのでしょうか。次に時代を追ってみていくことにいたします。明治時代、まさしく仏教音楽も草創期でした。洋楽的手法による作曲が開始されました。滝廉太郎作曲の「花」は皆さんもご存知だと思います。あれは日本人の作曲家が初めて西洋の音階を使ってつくった二部合唱曲です。初めての作品があれほど洋楽的に優れた作品として現在も伝わっているということはすばらしいことです。

大正時代は仏教音楽の成長期となります。昭和に入り、仏教音楽は第二次世界大戦の直前まで非常にしっかりとした組織で運営されておりました。文部省の中に仏教音楽協会が設立されたのです。そして新しい作品がどんどんつくられて、昭和四年（一九二九）四月から昭和十五年まで、合計十一回、百三十七曲の作品が発表されています。昭和十五年（一九四〇）という、第二次世界大戦開戦前夜の緊張が高まっている時期です。いずれにしても、第二次世界大戦が激化するまで政府の機関の中でこういった文化活動が実働していたのです。

終戦直後、龍谷大学、光華女子学園、大谷大学、京都女子大学、そうした仏教系の大学の活動が夫々に開始されました。昭和二十二年（一九四七）には、大谷楽苑が荒廃した人心を癒す目的で創設されました。こちらの学園の名譽総裁でいらっしゃった大谷智子裏方御夫妻のつくられた合唱団で、数多くの讃仰歌が、公募制化され発表されています。一方、組織的には、大谷派の合唱連盟が親鸞聖人の七〇〇回忌を期して昭和三十六年（一九六一）に発足しています。これは現在も続いております。

作品としては、昭和二十四年に蓮如上人の四百五十回忌の法費用に、土岐善麿と清水脩のすばらしいコンビで交声曲『蓮如』がつくられています。合唱以外にも、黛敏郎さんの作品

佛教音楽について

で「交響曲涅槃」というのがあります。これはシンフォニーで、一九五八年の作品です。また昭和三十六年の親鸞聖人の七百回忌には、皆さんご存じの『歎異抄』の一部分が土岐・清水のコンビで交響曲として発表されました。これはちょうど皆さんぐらいの年代の方々と、大学を出て間もないいわれわれ四・五名も含めて、三百人ほどで演奏させていただきました。東西両本願寺の唯一の合同企画行事として開催されましただけに非常に思い出のある作品です。

それから翌、三十七年（一九六二）には、仏教楽劇「念仏太郎左」というオラトリオが発表されています。この作曲者は菅野浩和先生で、この方は西洋音楽、宗教音楽にも非常に詳しい方です。この仏教楽劇「念仏太郎左」は、国内演奏は勿論のこと、三十九年（一九六四）には、アメリカ演奏旅行でも演奏され好評を得ました。

特に最近のことですが、『浄土の音楽集』が同朋舎から出版されました。この収録作品は、だいたい西本願寺のものが中心ですが、今までのものが網羅されております。以上、仏教音楽の流れをおおよそたどってみました。

ではこれから、「仏教音楽―そのひびき―」に入りたいと思います。今申しあげたようなことをお含みおかれまして、テープ演奏ではありますが、実際に仏教音楽をお聴きいただき

佛教音楽について

三、のんのののさま ほとけさま

みあかしあげて おがむとき

おすがたみえて きらきらと

ごこうのひかる ほとけさま

二番目に「わらんべ音頭」というのがありますが、これはまさしく盆踊りなどの風景で、踊りや手拍子や太鼓などが入ります。こういう踊りを伴った仏教作品も結構作られています。

わらんべ音頭

工

清定

作詩

渥美

芳映

作曲

清水

脩

編曲

一、星がまたたく お寺の庭に

お盆おどりの 輪がまるい

おどるみんなの 心もまるい

まるいお顔の ほとけさま

シャンシャン ヨーイトナ

シャンシャン シャンときて

みなおどれ

二、

虫もうたうよ

銀杏のかげに

笛やたいこの

音がはずむ

おどるみんなの

心もはずむ

はずむ音頭に

天の川

―くり返し―

三、

光る稲妻 お寺の屋根に

お盆おどりの

手が揃う

おどるみんなの

心も揃う

揃う稲穂に 稲びかり

―くり返し―

四、

風がささやく 柳の枝に

かざすうちわの 手がやさし

佛教音楽について

おどるみんなの 心もやさし
やさしおめめの ほとけさま
ーくり返しー

その次の「ほとけさまは」は、大谷楽苑の選定した讃仰歌の第七番目です。それをポニージャックスと東京の荒川の子どもたちが歌っています。

ほとけさまは

森山 美苗 作詩

弘田龍太郎 作曲

一、 ほとけさまはどどこにどどこにいらっしやる

春は 花咲く 枝のもと ララ

夏は 水辺の 草のかけ ララ

秋は 空ゆく 雲の上 ララ

冬は 窓うつ 雪の中 ララララ

いつもどどこかで 見ていてくださる

いつも何かをおしえてくださる

ほとけさまは

あれあれ あそこにいらっしゃる

二、ほとけさまはどこにどこにいらっしゃる

お眉 ま白な おじいさま ララ

お目々 やさしい おばあさま ララ

お胸 豊かな お父さま ララ

お手々 清らかな お母さま ララ ララ

昼でも 夜でも 守ってください

いつも あなたを支えてくださる

ほとけさまは

あなたのおそばにいらっしゃる

非常に日本的な家庭の雰囲気知られるような歌詞になっています。作曲者の弘田龍太郎さん

佛教音楽について

は『雨』、『靴がなる』、『春よこい』等の童謡をたくさん作曲されています。
それでは、次に一般の曲を聴いてみたいと思います。最初に「朝の歌」、これはソプラノの
ソロで歌っています。

朝の歌

杉崎

大愚

作詩

末広

恭雄

作曲

一、朝な朝なにみ教えあおぎ

浄き勤めにいそしむ我ら

二、朝な朝なにみあとを慕い

浄き思を語ろう我ら

三、朝な朝なにみ証たたえ

浄き意をやしなう我ら

四、慈恩あふるゝ貴き一日

今日も捧げん我らの生命

実はこれは昭和四年の作品ですので、歌詞を見ないとその内容を聞き取れなかったかもしれません。これを歌っていらっしやる方は大変な聞法者の方で、声楽の専門家でもありますから非常に思いがこもった歌唱でしたね。

次の作品、「鐘」をお聞き下さい。この「鐘」というのは男声の三部合唱曲になっています。

鐘

羽田野 仁 作詩

本居 長世 作曲

一、ゴーン ゴーン ゴーン ゴーン 鐘がなる

野越え 山越え 里越えて

鐘の響きが 追ってくる

響きの行くてを 追ううちに

お慈悲の姿が ゆれてきた

二、ゴーン ゴーン ゴーン ゴーン 鐘がなる

田越え 畑越え 家越えて

鐘の響きが 追ってくる

佛教音楽について

響きの行くえを 訪ねたら
お慈悲の姿が 見えてきた
ゴーン ゴーン

この作曲者の本居長世さんは皆さんもよくご存知の「十五夜お月さん」「赤い靴」「青い目の人形」などの童謡を作曲された方です。

次に「礼讃無量寿」に入りたいと思います。この作品は、お正信偈の冒頭に「婦命無量寿如来 南無不可思議光」とあります二句を使っています。全部が「南無阿弥陀仏」という言葉の翻訳です。

礼讃無量寿

正信偈

清水

修 作曲

婦命無量寿如来

南無不可思議光

この演奏はちょっと珍しい演奏です。本来は男声四部性合唱曲ですが、平成元年（一九八九）八月、ハワイのパロロ本願寺で演奏した混声四部合唱のテープです。このときに、実は日本の歌も数曲演奏しましたが、日本の歌を聞かれたご年配の方々が涙を出して喜んでくださったことを思い出します。「帰命」というのは、「私は帰依します」ということと同じ意味です。歌っている年齢は、高校二、三年から六十歳ちよつとの方々に総勢四十名余りの演奏でした。

それでは最後に、「みほとけは」に入りたいと思います。この作品は信時潔という方の作曲です。信時先生については後ほど少しふれたいと思います。

みほとけは

仲野 良一 作詩

信時

潔 作曲

一、みほとけは

まなこをとじて みなよべば

さやかにいます わがまえに

さやかにいます わがまえに

二、みほとけは

佛教音楽について

ひとりなげきて みなよべば
えみてぞいます わがむねに
えみてぞいます わがむねに

実際にはこれは三番まで続きます。それぞれ詩が非常に深い意味をもっています。これは実は終戦直後、大谷楽苑が公募をした作品の中の第一曲目です。作曲者は信時潔で、この方は山田耕柝と同時代の日本の代表的な作曲家です。本来クリスチャンの方です。信時先生が作曲された「海行かば」というレクイエム（鎮魂歌）が戦時中の国葬や戦没者の追悼会の度に頻繁に歌われました。戦後は、それが戦時中の軍歌の代表作品だということで排斥されました。信時先生はその責任を感じられ、その後作曲活動をやめていらっしやいました。やめていらっしやったのですが、昭和二十二・三年に「みほとけは」を作曲されました。その当時の状況をお尋ねしたく、御門主にお尋ねしたことがあります。詳しいことはわかりませんでした。

ところで、信時先生のお書きになった「海行かば」についてちょっとふれたいと思います。ここに、昨年八月発行されたある機関誌の編集者の文章があります。戦後五十年経った去年の

夏の文章です。たまたま女性宇宙飛行士の向井さんが地球を見た感想が報道されましたが、それと重ね合わせられます。

地球は美しかった。その美しい地球が暗黒に閉ざされた時代がありました。太平洋戦争の末期、昭和二十年の五月のことです。二人の特攻兵士が佐賀県の鳥栖小学校にやってきました。

特攻兵士は学徒出陣の方です。つまり十八、十九歳という皆さんと同じ世代の人でした。

「私たちは明日、沖縄に特攻隊として飛び立ちます。私たちは上野音楽学校のピアノ科の学生です。死ぬ前に思いっきりピアノを弾きたくて三田川から歩いて来ました。

この小学校から十二キロ離れた三田川のメタバルというところに特攻隊訓練学校があったそうです。その訓練学校にいた二人が十二キロの道を歩いて、ピアノを弾くために小学校に來られました。

時間がありません。ピアノを弾かせてください」。この学校には昭和五年に地域の婦人会が子どもたちに美しい音楽を、最高の音楽をと、ドイツから取り寄せて寄付したフツペルのグラントピアノがあったのです。上野うた子先生は急いで二人の兵士を講堂に案内する

佛教音楽について

と、ピアノの鍵を開けました。彼らは「おまえに会いたかったよ」と言わんばかりにピアノを弾きました。「何か楽譜はありませんか」「月光の曲」ならあります。「ではその曲を弾きましょう。先生、あなたの耳の底に私の『月光の曲』を残しておいてください」。まるでピアノが歌っているようでした。今まで聞いたことのないすばらしい演奏だったのです。そこへ校長先生が入って来られました。「五、六年生を講堂に入れなさい。『海行かば』と一緒に歌いましょう」。「この歌は私たちの鎮魂歌です。お葬式の歌は私たちが弾きます」。

フォルティシモでピアノが鳴り、子どもたちは大きな声で歌いました。時間がありません。みんなは運動場まで送って出ました。同僚の小林先生が白いユリの花を胸いっぱい抱えて走ってきました。「私の兄も戦死しました。お骨の箱を抱えて毎晩泣いております。この花を兄の死んだ海へ持って行ってください」。「わかりました……。今聞いたら。お兄ちゃんたちも死んだら、お父さんやお母さんが毎晩泣くだろう。だけどお兄ちゃんたちが死ななければ、この国を君たちに残してあげることにはできないのだよ。君たちが大人になるまで、この国を残すために、お兄ちゃんたちが死ぬんだから、良い子になれよ」。二人

の兵士は一人ひとりの子の頭を撫でると堤防に駆け上がりました。そして白ユリの花を高くかざすと、「死んだって海の底には沈まないよ。明日夕焼けが真っ赤になったら、兄ちゃんたちのお墓が雲の上に見えるんだ」と言い残して、夕日の彼方に消えていきました。

翌日、一機の戦闘機が鳥栖小学校の上空を旋回し、沖縄の方角に飛び去って行ったとい
います。

同じ若者です。軍国主義者や戦争賛成者として特攻隊兵士になったものではありません。このような若者が沢山居られた事実を知っていただきたいと思えます。ぜひ皆さんも機会がありましたら、鹿児島県の知覧等に資料館がありますので一度ご覧になってください。同じ世代の人たちがその時代をどう生きたか、それを知ることにも非常に大事なことだと思えます。

いま、信時先生が作曲された二つの作品を紹介しました。一つは、軍歌だという理由で捨て去られ、そのために筆を折られていたのにも関わらず、もう一つの「みほとけは」を作曲してくださいました。その思いをお聞きできなかったのは非常に残念です。いつかそのことがわかる時があれば……と願っております。

最後に仏教音楽の目的についてお話したいと思えます。仏教音楽の目的とは一体何でしょう

佛教音楽について

か。仏教音楽をやったからといって経済的に楽になるわけでも、有名になるわけでもありません。そんなことではなくて、真実の生命のひびきと出会うということが目的なのです。

そこで、真実に関しての言葉を若干ご紹介したいと思います。最初はペーター・ベンの言葉で「Von Herzen—Möge es wieder—zu Herzen gehen」。「心から、そして再び心へと伝わらんことを」が意味です。次に「Sangiti」。これは先ほど申しました「結集」の原語で「共に歌い合う」ということです。それから、金子大栄先生の「お浄土は音楽の世界ですよ」という言葉。お浄土というのは死んでからという形でみる人もありますが、そうではなくて、私は現在のこの場も私にとっては一つの浄土だと思っております。

そして四番目に「抱かれて ありとは知らず愚かにも われ反抗す おおいなる御手に」という九条武子さんの言葉があります。皆様もきつとこれを実感できる日がくると思います。

五番目は、安田理深先生の「本当のものがわからないと、本当でないもを本当とする」という言葉です。オウムの場合もそうです。原始仏教を誤解した形が残念ながらあいう形となりました。キリスト教を誤解した形がハルマゲドンになりました。非常に残念なことです。

そして最後にご紹介いたしますのは、実際に生命についてそれを教えてくれる言葉です。

自分の番　ーいのちのバトンー

父と母で二人

父と母の両親で四人

そのまた両親で八人

こうして数えていくと

十代前で千二十四人

二十代前では……？

なんと百万人を越すのです

過去無量の

命のバトンを受けついで

自分の番をいきている

それがあなたのいのちです

それが私のいのちです

(相田みつを)

佛教音楽について

自分の番、私の生命、これは当然次の世代への生命のバトンタッチです。今、バトンを持って走っているわけです。その走りはやはり着実でなければなりません。そのとき初めて生命のバトンを実感できるでしょう。二十代前で百万人を越すのです。二十四代になりますと一千万を越します。こんな数多い先祖たちのことを、私たちは日常的に感じることは少ないですね。逆にその先祖たちの生命がけのバトンがずっと凝縮されて現在のわたしたちの生命になっているのです。この事実を大事にしないわけにはいきません。そしてそれを自分たちの子どもたちにも伝えるには参りませんね。こういう悠久の歴史、生命の流れ、そういったものから、例えば私の背後に法輪があります、この法輪は、佛陀の教法が生命の流れや働きとして、普く広まり、伝わらんことをシンボライズしたものです。即ち、私たちに注がれている親たちの願いに気付かせられること、目覚めること、それが仏教の教えであります。

大雑把にお話し申しあげてまいりましたが、親たち、先祖たちの生命がぎゅっと凝縮された現在のあなた方は、限られた次の世代への生命の中で、ぜひいろいろな友だちや先生方との出会いを大切にしていただきたいと思えます。「一期一会」という言葉があります。「一期一会」の違いで阪神大震災のときに五千名余りの方々が、自分の力ではない自然のどうしようもない

力のなかで生命を落とされました。こんな悲しいことはないと思います。だからこそぜひ一刹那、一瞬一瞬という時間を大切に歩んでいただきたいと願わずにはおられません。

いずれにいたしましても、宗教ということはけっして超自然的なものだとか、形而上学的なことを求めるものではありません。真実なことに目覚めることです。それが「仏陀」という言葉の語源でもありました。そして、この全体の中に、例えば皆さんの体の中には細胞がたくさんあります。体は一つですが、それは数十億という細胞によって支えられている生命でありまゝ。そうした小さいながらも支えあう生命のすべてを大切にしなければならぬのだということに気づかせてくれるのが仏教だと思えます。そしてその教法の響きを学び、実際に感じることでできる方法の一つが仏教音楽であると思えます。

ともすると私たちは一人で立っているつもりでいますが、実際には、物心ともに種々な要素や御縁に支えられて生きている、生かされて生きている。また、自分では気がつかないけれども人を支えているということもあります。そういう人と人との関係、ご縁をぜひ大事になさって、将来悔いのない家庭に恵まれるように、この若い時代を精一杯生きていただきたいと思います。願っております。厳しい社会環境のなかです。大変な世の中になってきますが、どうぞ皆さ

佛教音楽について

んご自分の生命を大切になさってください。御清聴いただき、どうもありがとうございました。

—一九九五・五・二六—